
願いごと

倉花 明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願い」と

【Zコード】

Z2189BA

【作者名】

倉花 明

【あらすじ】

破壊、それしか知らない一人の少年と、異常を弄ぶ少女の物語。

少年は破壊のために少女を壊した。少女は異常ゆえに少年を壊しだぐ。

終わることのない破滅の物語。

始まりさえ壊れてしまった物語。

プロローグ（前書き）

初作品となっていますので、文章が拙いと思います。ご了承ください。

プロローグ

プロローグ

僕は、空を見上げた。暗い。まるで、僕の心を映し出しているようだ。月明かりがある分、僕の心よりはマシかもしない。

チラホラと星が見える。何だ、十分明るいじゃないか。憎たらしい。

僕は、憎々しいながらも、夜空に輝く星々を見つめた。そして、願った。

何を願ったか？僕の切実なる願いだ。七夕なんかの軽いノリじゃない。いたつて真剣な願いだ。

それは、何でもできる素晴らしい能力でもなく、僕を一途に愛してくれる彼女でもない。

そんなものいらない。

僕の願い、それは何でもできる素晴らしい能力をもった、僕を一途に愛してくれる彼女。

日暮瑞希の消滅だ。

一章『出会い、始まる』

一章『出会い、始まる』

僕は、通常の高校生の数割程の機能しか持たない運動神経を酷使していた。

「今日こそは……、絶対に手に入れてやる」

そう呴いて、僕はラストスパートを駆け抜けた。駆け抜けると言つても、

はたから見たら、マラソン大会の中盤くらいのスピードなんだろう。僕は、自分の運動神経の惫けぶりに、そろそろ愛想を尽かしそうだ。「着いた、はあ、うえ、……」

激しい 疲労に襲われるが、気にしない。達成感が上回っている。人はいない。いるのは購買のおばちゃんだけ。勝った。そして買える！僕は、反抗期に入った表情筋を無理矢理動かし、満面の笑顔を作る。

僕はゆっくり、余裕をもって乱れる呼吸を鎮めた。

「おばちゃん、こんにちわ」

「おや、随分早いじゃないか」

「授業を途中で抜けたんですよ、特製カレーパンを今日こそはゲットするために」

そう、僕はこの学校で、最も美味しいと言われる特製カレーパンを買うために、授業を途中で抜け出して全力ダッシュをしていたのだ。

この特製カレーパンは、あまりにも人気がありすぎて、授業終了後五分で完売すると言つ。個数は百個ある。どう考へても五分で完売させるのは不可能なはずだが、実際に起きているから信じるしかない。

ただ、この学校の生徒は皆真面目だ。授業を途中で抜けるような不真面目な生徒は存在しない。ただ一人、僕除いて。

別に、僕が異常つてわけじゃない。みんな僕に負けず劣らず異常だ。

「悪いねえ、あれは販売が中止になつたんだよ。先週の金曜日にそう聞かなかつたのかい？」

このババア何を言つているんだ？ふざけるなよ、販売中止？全くもつて面白くない冗談だな。

「いやだなあ、さつさと売れよ」

「だから、ないつていつてるだろつ。聞き分けがないねえ。諦めて他のパン買いな」

どうやら本当らしい。だとすれば、僕のこの堪え難い疲労感はどうすればいいとこりうんだ？報われないじやないか。

僕は珍しく怒つた。誰だ？誰が販売中止に追い込んだんだ？そついや、このババアさつき、金曜日に聞かなかつたのか？つて言つてやがつたな。金曜日に何かあつたのか？ちつ、丁度僕が休んでいた日じやないか。誰か仕組みやがつたか？

クソッタレがつ！ふんつ、まあいい、所詮はパンだ。そこまで執着する必要はない。一旦落ち着いて気持ちをリセットしよう。

「さよなら、おばちゃん」

返事がなかつたが、気にしない。返事なんて期待していなかからだ。足元に広がる、赤い水たまりも気にしない。ましてや、中年女性の屍など……

僕は気晴らしに屋上へと向かつた。体が疲労感に蝕まれ、鉛のようにも重い。必然的に気分も重くなる。

だるい。その一言に尽きる。

「はあ、特製カレーパン食べたかったなあ。まあ、ないものはしようがないか」

僕は屋上へ出た。何とも言えない解放感があつた。穏やかな風が僕の体を包み込む。幸せと言つもののは、こういう時に感じるんだな。屋上で自殺する人間の気持ちが少しわかつた気がする。

僕の優しい風に対する感慨は開始から十秒ももたなかつた。

人がいた。屋上は立ち入り禁止だ。なのに生徒がいる。不真面目なのは僕だけのはずだ。ここに人がいるなんてあり得ない。

僕は尋ねる事にした。

「君が、持つていいパンは特製カレー・パンじゃないか？食べさしでも構わない。良ければ僕に譲ってくれないか？」

「いいよ、あげるからこっちに来て」

その子は言つた。その女の子は言つた。その可愛い女の子はそう言つた。

「ありがとう。君、可愛いね」

僕は彼女からパンを受け取る間際のそう咳いた。その際、しつかりと手を触つた。人間関係を築くついで、接触と言ひ行為は非常に大きな意味を持つ。

「そんな事ないよ……」

恥ずかしそうにして、頬を赤らめ、俯く彼女を好きにならないでいられるだろうか？

不可能だ。

早速、本能に従つて口説く事にした。

「あはは、謙遜する必要はないよ。寧ろしちゃダメだ。君みたいな可愛い子が謙遜したら、君以外の可愛い子の立つ瀬がないでしょ？もつと自分に自身を持つて。そうすればもつと可愛いなるはずだから」

完璧。どんな女の子でもこれでイチ口。

「あ、ありがとう。嬉しい」

ハニカミながら微笑む彼女に一生分のときめきを消費してしまつた。来世の分を前借りしとくか。

「君、名前は？」

「え、あつ、えーと、日暮です。日暮瑞希です」

「瑞希さんか。可愛い名前だね。好きになっちゃいそうだよ」

ちよつと距離を縮めるのが早過ぎたかな？まあ、問題ないでしょ

う。

僕はパンを飲み込んだ。そして、彼女を見た。
その瞬間、余裕。そう思った。

「好きになっちゃうの？私のこと？本当？」

「違う」

言った瞬間、彼女は顔を燃やした。いや、燃えているのか？と思つてしまつほど赤くなつた。

「ごめんなさい。か、勘違いしちゃつて……」

「ホントに勘違いも甚だしこよ。僕はもう、君のこと好きになつてこる」

どうやら、彼女は顔を赤くするのが好きみたいだ。これから、僕のラッキーカラーは赤にしよう。

「あ、あわわ、そ、そんな……。嬉しい」

落とした。といふか、始めから落ちていた気がする。ビックリしろ、こんな可愛い子を取れれば文句はない。

とじめの一言。

「良かつたら、僕と付き合ってくれない？」「わ、私なんかで良かつたら。お願ひします」

僕は今日、可愛い女の子を自分のものにした。こんなに可愛い女の子を好き放題に……、
むふふ。

「ありがとう、よろしくね瑞希さん」

「はいっ！あの、あなたの名前……、教えて欲しいな」

「ああ、僕の名前？僕の名前は……」

強く大きな風が吹いた。さつきまでとは違つて、乱暴な風だった。

自殺志願者がこれで思いとどまるのか。

「だよ」

「いい名前だね」

一章『異常者、崩壊』

一章『異常者、崩壊』

気分はバベルの塔。今にも天に登つて行きそうだ。それも悪くはないが、足が地についてる方が幸せだ。

教師にこつぴどく怒られたが、うわの空。さらに怒られ、めんどくさい。だから逃亡し、屋上に逃げた。制服に赤いシミが出来たが、まあ気にしない。どうせもう赤いシミだらけなわけだし。さてさて、屋上に着いたわけだけど、誰もいない。

「あれ？ 瑞希さんどこ？ おかしいーな、もう来ているはずなのに」急に目の前が暗くなつた。
えつ？ 僕の現実これで終わり？

「だーれだ」

生温かい感触がする。人の肉だと言つことを察知するのに、大きく時間は取らなかつた。声から判別するに、僕の愛しい彼女の瑞希さんだろ？。だからと言つて、そう決めつけるのは危険だ。声帯模写ができる奴なんて腐る程いる。

とりあえず殺すことにしよう。これが一番安全な方法だ。
血が吹き出る。ああ瑞希さんの血だ。なんだ、瑞希さんであつていたんじゃないか。悪いことをしたな。とは思わない。

「瑞希さんだね」

「正解だよ。でも、一々殺さなくても良い」と思つた

瑞希さんは今日も調子が良いみたいだ。

可愛いな。

「瑞希さんだから大丈夫でしょ？ あ、服綺麗にしてくれてありがとう」

「私以外の人を殺したでしょ？ どうしてかな？ 私たち付き合つてゐんだよ。どうしてそんなことするのかな？ 浮氣と一緒にだよ。もう、私は飽きたの？ 嫌いになつたの？ 私何か悪いことした？ それなら謝

るから。お願ひ、私を見捨てないで。私はあなたのことがずっと愛し続けるから。嫌いにならないで」

瑞希さんはヤンデレだ。付き合つた初日にすぐ気付いた。恐ろしいほどの言及行為。ヤンデレと言うのは、相手のことが好き過ぎるあまり、相手のことを考えずに、自分の愛情を表現することになる自己満足の塊だ。

「「めんね、瑞希さん。でも、誰かを殺すのは、僕の勝手だよね？」
瑞希さんがどうこう言つことじやないよね？」

瑞希さんは泣いた。しゃがみ込み、俯いて、顔を手で覆つようにして泣いた。

煩わしい。

僕は瑞希さんを殺した。肉が飛び散り、骨が砕け、血が舞い踊る。目が転がり落ち、腕が？げ、足が彷徨う。頭が潰れ、内臓が抉れ、神経が絡まる。僕は、脳がむき出しになつている頭骨を踏み潰した。瑞希さんを殺すのはこれで何度もになるんだろう？相当な数殺したと思うけど……。

「私のこと好き？」

「うん」

どうしてだらう？瑞希さんを殺しても、何度も殺しても、満たされない。

瑞希さんに会つてから僕はおかしくなつた。人を殺す回数が異常なほどに増えた。みんな死ぬ。殺せば死ぬ。死ぬはずなのに……死がない人に出会つた。何度殺しても死はない。僕が殺せない。僕が壊せない。そんな存在はおかしい。僕は無力なんかじゃない。ちゃんと殺せる。ちゃんと壊せる。

日暮瑞希。たつた一人の例外を除いて。

日暮瑞希はこの世界においても異常だ。異常が普通のこの世界においても異常だ。

僕は、この異常を壊したくて仕方がない。この異常が壊れる瞬間を見てみたい。

「嬉しいな。あなたが私のことを、好きって言ってくれる。それだけで満たされる。あなたのためなら何でもできると思つ。ううん、何でもする。あなたが好き。あなたの全てが私の世界。愛してる。違うの、こんな言葉じゃ伝えきれない。でも、わかってくれるよね

? 私、あなたに嫌われたらどうなっちゃうんだから。あ、『ごめんなさい。あなたが私のことを嫌いになるなんてないもんね。気分を悪くした?』ごめんね、でもそれだけあなたのことを思つてるの」

こんなことを満面の笑みで言われたら、壊したくなるじゃないか。
ムラムラしてきた。早く壊したい。抑えられない生衝動。いや、逆だね。僕の生衝動の発散で、生きられる者なんていないんだから。

そりか！そりにうことか！あはは、なんだ簡単じゃんか。田暮瑞希を壊すなんて。どうして今まで気づかなかつたんだろう？笑ひけやう。

「誰がやん」「なあ」「?」

「嫌い。大嫌い」

世界が一瞬にして消えた。

二章『破壊者、墜ちる』

二章『破壊者、墜ちる』

「ちつ、異常にもほどがあんだろ」

僕は闇に包まれた町を見渡した。何もない。光すらない。異常すぎる。想像以上。

「みつけた」

僕は、全身に奔る激痛を無視して、走った。こんなに痛いのに死なないってのが驚きだ。まあいいや。こっちだつて策がないわけじゃないんだ。殺る。殺つてやる。僕は伊達に破壊者つて異名をつけられているわけじゃないんだ。なにがなんでも壊してやる。異常者は異常者らしく異常の中で異常しとけ！世界を間違える暇があったら死ね。

僕は背中にかかる血を意識しつつ、太腿に刺さった骨を抜いた。首下にこべりついた肉を拭いた。あ、ついやってしまった。僕は無駄な動作を少し悔やんだ。気付けば、血も、肉も、骨も全て消えていた。いや、全て元通りになつて僕の前に立つっていた。

「どうして逃げるのかな？」

「瑞希さん怒ってるでしょ？」

答えは、僕の腕を瑞希さんが持つていてることでわかつた。いつのまにか片腕がなくなつていて。もう、痛みなんて感じない。感じる暇がない。僕は自分の腕ごと、彼女を壊した。

肉片が飛び散つた。僕の足元に転がってきた田玉が僕を睨むように見つめる。僕はそれを踏み潰そうとしたができなかつた。足がない。足が消えている。ふざけやがつて。

「僕の足、返してくれない？このままじゃ今年の運動会でリレーに出れないでしょ？」

「あなたの体は私のものよ。私がどうしようといいじゃない」

瞬きする間もなかつた。僕の頬に瑞希さんの吐息がかかる。

「あなたの、温かい心臓もあたしのもの」

僕は目線を下ろした。おいおい、僕の胸に腕が入り込んでるよ。僕は新品の腕で彼女を突き放した。バカをやつた。瑞希さんは僕の心臓を抜き取りやがった。僕の胸からは滝のように血が流れ落ちる。「クソガツ！返せっ！殺すぞっ！」

「怒りないで、怒っちゃダメだよ」

僕の目の前にいる異常者は、喰つた。僕の心臓を喰つた。喰いやがつた。僕は初めて怖くなつた。僕は今まで何をしていたんだ？僕の行動なんて普通中の普通じやないか。風が吹くように、雲が流れるように、僕は普通に生きていただけじやないか。恥ずかしいよ。自分のことについて最近まで異常なんだと思つていたのに。所詮、僕は普通なのか。僕は静かに息の根を止めた。

僕は目を開けた。目の前で瑞希さんが笑っていた。口には僕の血

僕は生地返したらしく、がへこむといつてない。むかむかする。僕は生地返したらしく、がへこむといつてない。むかむかする。

僕はギレた。これは初めてのことだと思う。人の肉をこんなには絶たく壊したのは初めてだ。彼女の細胞が悲鳴を上げているのが聞こえるようだ。僕は全身に浴びた血を書き消し、転がっている骨を消滅させた。そして叫んだ。

喉が千切れた。盛大に血を吐いた。のど飴舐めても意味なさそうだな。ちつ、もう声がでないか。でもこれで僕の勝ちかな。

「そんなはずないでしょ？」

何で壊れないんだよ！僕は破壊者だよ。それなのにどうして？

「あなたは何も壊せないよ。私が全部直すんだから。遅くなつたこ
一は謝るドン、記録用紙も同一の二つねじの前二現でみまうけどもな

とは語るでも
元壁り
ないのはあなたの前に現れるな
んてできな
かつたの」

僕が破壊者じゃない?何を言つてるんだ?僕は破壊者でしかない。

破壊者という肩書きだけが僕なんだ。
それなのに……。

こいつは僕の全てを否定するのか？なら、その否定も壊そう。僕

は破壊者だ。

「違うよ。あなたは普通。ただの普通」

「ふざけるなああああああああああああああ！」

「僕が普通？ そんなはずない。 破壊者僕が普通なはずない。」

僕は壊した。壊れないおもちゃを壊した。倒れない人形を何度も倒そうとする子供のように。千切れない人形を何度も千切ろうとする子供のように。何度も血を呑んだ。何度も肉を喰った。何度も骨を吸つた。何度も心を壊した。まだ壊れないのか？ いつになつたら消えるんだ？ どうしたら僕の前から消えるんだ？

「消えないよ。あなたの為にまだ終わらない。終わらない。終わらせないよ」

「僕の為？ 何が僕の為になるの？ 僕はなんにも願つてないよ。」

「願つたよ。何度も何度も私に願つたよ。また、願つてみる？」

「願うよ。願つてやるわ。消えろ。 いうのの前から消え失せろ！ 消滅しろ。」

「いや。もう、ダメ。それはダメ。意味ない。何度も同じことを繰り返すだけだから」

願いを叶えてくれない流れ星によくなんてない。勝手に流れればいい。涙を流したところで、変わらない。流れないなら壊すだけだ。さあ、壊れろよ。

「ダメだよ。ごめんね、私が遅すぎたから。あなたは壊れたのね。自分で壊してしまったのね。本当にごめんね。もっと、もっと早くつたら。もっと早く私があなたの星になれたら、こんなのことにはならなかつたのに」

自分を壊した？ 何を言つてるの？ 僕は壊れてなんかいない。僕は壊れてない。僕は壊すだけだ。壊れるなんてありえない。もういいさ。破壊者である僕をここまで虚偽にしたんだ。壊れるまで終わらさない。なにが何でも壊す。壊れるまで壊す。壊して壊す。

僕は目の前の肉の塊を圧縮した。彼女は無表情のままどんどん潰れていく。骨が折れる音がする。バキバキ、グキヤグキヤと。肉が

抉れる音が聞こえる。グチャグチャ、ブチブチと。血が吹き出る音が響く。ドピュドピュ、ヌチョヌチョと。それでも彼女は小さくなつていく。無表情のままで。そして、消えた。

背後を取られた。腹に手が回る。相手の腹が背にあたる。僕はとりあえず、駆逐した。生暖かい液体が僕の体を覆う。そんなものに目をくれず、横にいる瑞希さんを千切つた。そのままの勢いで、前方にいる日暮瑞希を押しつぶした。僕は休まずに上にいる女性を刺し殺した。そこで気を抜かず、僕は、僕を抱きしめる女の子を抱きしめた。

そして潰した。僕の体に、瑞希さんの骨が刺さる。瑞希さんの血が僕の中に入る。瑞希さんの肉に埋もれてしまう。

僕は死んだ。

四章『始まり、狂ひ』

四章『始まり、狂ひ』

「君、名前は何ていうの？」

「俺か？」

「うん」

私は今、好きな男の子と会話をしている。大好きなあの子と会話をしている。勇気を出して話しかけたんだ。絶対に仲良くなる。好きな人の名前を知らないっておかしいのかな？おかしいよね。でも、それだけ調べても彼の名前は出てこない。不思議だ。そういうところがつっこ良いな。

「俺の名前は秘密だ」

「どうしてかな？」

私は戸惑いながら聞いた。最後の手段、本人に聞く。「これが一瞬で無駄だと気づかれるなんて。恐るべし、流石私が好きになつただけある。

「じゃあ、どう呼んだらいいの？」

「クラッカー。クラッカーッて呼んで。みんなそう呼んでるから」

「クラッカー？パーティーとかで鳴らすやつ？」

彼はキヨトンとして私を見た。え？私変なこと言つた？どこかおかしかった？どうしよう、嫌われたら生きていけない。

「お前、面白いな。パーンいてなるやつだろ。ははは、俺ははじけた方がいいか」

「ごねん、その……。どういう意味なの？」

彼は心底、楽しそうに笑っていた。嬉しい。私も笑つた。軽く、囁き声のように小さい笑顔をつくつた。

「俺のあだ名の由来は、破壊者。つてのからきてるんだ」

「はかいしゃ？」

「そう、破壊者。俺は何でもすぐ壊してしまつから、破壊者。^{クラッカ}者つてわけ」

かつこいいー。凄いよこの人。完全に惚れちやつたよ。心奪わ
れちゃつた。いつそ私の全てを奪つて欲しい。

「お前は？」

「え？ 私？」

何？下心に気付かれた？そんなはずない。わかるはずない……。
「いぢいぢ面白いな。俺が聞いてんのは、お前の名前だよ。日暮つ
てのは知つてるけど、下の名前知らないんだよ」

私の名前……、知つてる？同じクラスだから？席が隣だから？

喜んでいいの？嬉しいけど、喜んでいいの？

「み、みず……、き。瑞希」

「瑞希？ 可愛い名前だな」

「うう、死んじやうよお。可愛いなんて言葉、凶器だよ。

「ありがと……。クラッカー君、その、名前。どうして秘
密なの？」

「聞きたい？」

「う、うん」

彼は無邪氣に笑つた。今生きてることだが、何よりも楽しい。そ
う言いたげに

私はそんなことできない。生きることが楽しいなんて思えな
い。面白くない。つまらない。平凡すぎる。普通過ぎる。

「理由は簡単、名前が誰にも知られてなってかつこいいじやん。
普通に名前知られるなんて面白くないだろ？だから、俺は名前を隠
すんだ」

「普通は嫌いなの？」

彼は少し考えてから、大嫌いと答えた。

「普通より異常の方が面白い。面白いのが一番いいだろ？」

「うん」

私は大きく頷いた。大好きな人と同じ考え方をしてる。たつた

それだけのことなのに、狂ってしまいそうなほどに幸福感が、溢れ出す。私は思った。この人のためなら何でもしようと。自分の全てを犠牲にしても、この人に尽くそうと。

「なあ、今日一緒に帰らないか?」

「うん?待つてよ、思考が追いつかない。一緒に?帰る?へつ?私死ぬの?遺書まだ書いてないのに?え?死ななくてもいいの?ううん。死ぬよ。嬉しそうに死んじゃうよ。

「はひゅつ。いいの?」

はいって言えなかつた。恥ずかしい。

「うん。一緒に帰ろ」

彼は荷物を持った。笑顔でこっちにくる。彼の全てが私に近づく。私の細胞が一つ一つ、喜びに震えてる。血液が血管を全力で駆け回ってる。心臓のダンスは最高潮に達してる。脳は体温に身を任せ溶けようとしてる。心はさつき全部奪われたからどうしようもない。私の体は彼を受け入れてる。なら、言葉も

「うん!お気をつけて。はあ、私も一緒に帰るんだ!じゃ、じゃあ、お気をつけて帰りましょう!」

恥ずかしい。

五章『運命、嘘』

風のせいで、田に髪が入る。手でのけて横をチラ見する。「でな、その星に願えばなんでも叶うらしいんだよ」

「ほ、ホント?」

彼が言うには、世界中に散らばつてる願い星つて書いつ星を、彼のお父さんが見つけて家においてあるらしい。その星はとっても明るいらしい。彼より明るいものなんてあるの?ないない。それで、その星は何でも叶えてくれると。嘘くさい。そんなのないよ。サンタクロースはいないんだから、願いを叶えてくれる星もないんだよ。はあ、願い星欲しいなあー。どうせ親父が使うんだろうし。いいなー

「何か願いたいことがあるの?」

「うん、一つ。とつても大きな願いごとが」

彼の願いごと。なんだろ?気になるな。どうせ、私をときめかせるようなかつこいい願いごとなんだうな?うな?

「教えてよ」

「いやだ。恥ずかしい。それに瑞希に言つたら終わる

「え?……え?」

私は言つたら終わる?どうこいつ意味?私なんかに言つたらその価値が下がるつてこと?私嫌われてるの?どうして?やつきまで普通に話してたのに。まさか、私が普通だから愛想つかしたの?「ん~、やっぱ俺の願いごとは自力で何とかしないといけないよな。そうじやないと嬉しくないし。瑞希に怒られるよ」

「私に怒られる?何?わからなによ。どうこいつとなの?」

「なあ、瑞希。お前好きな人とかいる?」

「ええ?……いきなりどうしたの?」

「いや、やっぱこいつ。そんなの聞くのは卑怯だな。ちゃんと真正面

からいがないと」

もう…さつきからひぱりだよ。何が言いたいの？

「瑞希、好きだ。付き合ってくれ」

……？は・ひ・ふ・へ・ほ・？意味が理解できないよ？好きだ？私はあなたのことが好きですよ。だからどうしたんですか？付き合つ？くつ付いていいですか？接着剤より付きますよ。接着剤つて指についたら大変だよね。大変つて大いに変つて意味だよね。みんなバカにされてるよ。バカつて言つたら馬と鹿に失礼でしょ。あははダメだ。変なことしか考えられない。今、私の頭は大変だ。

「冗談はほどとどきす……、じゃなくてほどほどにしないと」

「冗談じやない。真剣だ」

彼の表情は、真剣をもつてる人のような真剣な面持ちだつた。なら私も真剣にならないと。「私も好きだよ。大好き。だから、その……、よろしくお願ひします」

「いいの？ありがとう！嬉しいよ、瑞希！」

あわわ、そんなこと言つたらダメだよ。死んじゃう。でも、もう死んでもいい。

「喜んでいいの？」

照れ隠しには下手過ぎた。

「もちろんだよ。好きな女に喜んでもらえると嬉しいくなるよ、きやー。蕩けるー。

「あ、ありがと」

「礼を言つのは俺の方だよ。本当にありがとう」

満たされる。純粹な幸福感だけで私の中が満たされる。血肉に染み込んでいく幸福感が全身を温める。脳髄に響き渡る幸福のメロディーが全身を温める。温かい。いや、もう熱いよ。沸騰しそう。蒸発してしまいそう。

「顔赤いぞ。何か冷たいジュース買つてやるから待つてろ」

彼は赤い顔を隠すようにし走り去つた。彼も私と同じ気持ちなのかな？だと嬉しいな。とっても嬉しい。

突然、世界に呼び戻された。肩を叩かれた。振り返ると、見したことのない人がいた。

「唐突で申し訳ないが、申し訳なくしている時間はない。お嬢さん、あなたは運命を信じますか？」

「運命？私は迷うことなく、その人に言った。

「はい。信じますよ」

「その人はにやけた。

「では、運命を受け入れられますか？」

「もちろん」

言うと同時に、後ろで大きな音がした。車のうるさいブレーキ音、見知らぬ人の絶叫。私はいつのまに遊園地にいたのだろう？不覚にもそんなふざけたことを考えた。何があつたんだろう？交通事故？私は後ろを振り返り、小走りで向かつた。事が起こったばかりだから野次馬は少い。現場を見るに、トラックが人を轢いたらしい。私は普通ではない光景をじっくり見ていた。そこで、轢かれた人はどうなつてゐるのかを見た。

「運命を受け入れられますか？」

頭の中をその言葉が反芻した。赤い水溜りで溺れていたのは、見知らぬ誰かじゃない。

彼だった。

六章『世界と運命の改竄』

どうして？どうして彼はあんなところで寝てるの？眠いなら早く家に帰ればよかつたのに。どうして？どうして彼は赤い水溜りの中にいるの？風邪ひいちやうよ？どうして？どうして？どうして？ねえ、説明してよ。お腹から中身が出てるよ？早く仕舞わないと汚いよ？死んでる？ふざけないで。そんな冗談聞きたくない。だって、わざきまで一緒に話してたのよ？死ぬわけないじゃん。どうして？どうして救急車が来るの？どうして彼を連れて行ってしまうの？やめてよ。返して。彼は私のものよ。誰よ！放して。私の腕を掴まないで。早く彼を取り返さないと。彼にもう会えなくなるじゃない。「放してよ！」

私は腕を掴んでる腕を振り払った。その拍子にそいつの姿が見えた。

「お嬢さん、運命を受け入れないのですか？」

「つむるさい！あなたね！あなたが彼をつ！」

「どちらが五月蠅いかはさておき。お嬢さん、あなたは願い星というものを知っていますか？いえ、知っていますよね？」

なんでこいつがそれを知ってるの？私と彼の会話を聞いてたの？やつぱりこいつが彼を……

「だから何？それがどうしたって言うの？早く消えて！」

「質問しておいて消えろとな。お嬢さん、願い星。欲しくありませんか？彼を取り戻したくないですか？運命に奪われたあの愚かな少年をもう一度、自分のものにしたくはありませんか？」

「あるの？あなたは持ってるの？」

「ええ。お嬢さん、今、現在、この懐に入っています」

「願い星。それさえあれば彼を取り戻せる。

「頂戴！それがあれば…………。それさえあれば彼は…………」

・

「勿論、差し上げますよ。しかし、願い星は願い主に対価を求めるま
す。お嬢さん、あなたはその対価を払う覚悟はあります？」

「お金ならいくらだつてだすわ！彼のためならそんなもの……
」

目の前のそいつは軽く微笑んだ。なにがおかしいの？「こつちは真
剣なの。

「お嬢さん、あなたは少し勘違いをしておられます」

「勘違い？」

「ええ。お嬢さん、対価とは金銭のことではございません。お嬢さ
ん、あなたの世界が対価となるのですよ。願いの大小にともない、
その代償、願い主の世界が変わるのです」

私の世界？彼がいない世界なんていくらでもくれてやる。こんな
世界いらない。彼さえいれば私の世界はどうなつてもいい。彼だけ
で私の世界は構成さえてるの。

「別にかまわない！私の世界なんていくらでもくれてやる。それで
彼を取り戻せるのなら。安いわ！。安すぎる。私の世界と彼とな
らとしても安い取引だわ」

そいつは再び、先程よりもおかしそうに微笑んだ。まるで私をバ
力にしてるようだ。こんな奴になんて思われてもいい。彼さえ、彼
さえ取り戻せるなら。

「そうですか。お嬢さん、こちらの箱に入っているのが願い星とな
ります」

「ありがとうございます。これにお願いをすればいいのね」

「はい。しかし、今ここで願いごとをされるのはご遠慮頂きたい。
願い星は、あまりにも明るすぎます。その光はお嬢さんのような覚
悟をもつていない人にとっては毒となります。いえ、お嬢さんにも
毒となるでしょう」

「そう、わかったわ」

私はその箱を受け取ると自分の家まで、一気に駆け抜けた。自分

の部屋に着くと、荷物を置いて、息を整え、箱を見た。今初めて気付いた。この箱は不気味すぎる。黒を暗くしすぎたような赤。あいつはなんて悪趣味な奴なんだろう？そんなことを考えながら呼吸が落ち着くのを待つた。

やっと落ち着いた。私は大きく息を漏らし、箱を見つめた。そして、恐る恐るその箱を開けた。開けた？開けたと思う。開いたかどうかはわからない。何も見えない。光しか見えない？明るすぎる。目が痛い。頭がぐらくらする。目を瞑つても光を遮断できない。見えなくともいい。星はあるんだから願いを言えばいいんだ。

「彼を私のものにして！」

叫んだ。すると、見る見る世界が暗くなつてくる。願いは叶つたのか？彼女は僕のものになつたのか？どうなんだ？

彼女？

僕？

どうして？彼女は彼女？僕は僕？あれ？何か違和感がある。彼女は彼女だったのか？僕は僕だったのか？

彼女？誰？彼女って誰？僕は何を考えているんだ？わからない。ならそれでいい。ああ、無性に何かを壊したい。僕は破壊者だから仕方ないことだけどね。

あ、お母さんおやすみ。

あ、お父さんおやすみ。

七章『主催者の導き』

ほつ、どうやらお嬢さんの世界は酷く破綻してしまったようですね。お嬢さんにとって、彼の存在はそれほど大きいものであったのでしょうか。

お嬢さんは男性に。更に、彼の破壊者という名を自分のものにしてしまった。普通を嫌っていたお嬢さんは、異常な力まで手に入れてしまった……

彼は女性になってしまったのですね。ほつ、お嬢さんの世界から退場させられているじゃないですか。今回は星も意地悪なことをしますね。

面白い。素晴らしい限りですよ。今までの中で最も楽しめそうですね。この実が熟せば、きっと愉快なことが起こるのでしょう。

それまでは箱庭で育つていてもらいましょう。お嬢さんにとっては異常者しかいない異常地帯という認識になるのでしょうかね。様々な人の世界が交差する場所。管理をすることはやはり骨が折れますね。

おつと、これは面白いことを考えましたよ。お嬢さんが使用した願い星、これを彼に渡して、お嬢さんの世界に強制的に引き摺りこみましょう。

これは目が離せなくなりますね……
愉快な娯楽です。当分は暇を知ることはないでしょう。

八章『打ち終わった終止符』

八章『打ち終わった終止符』

僕は再び目を覚ました。また殺されたのか。破壊者である僕が二度も殺されたのか。信じ難い。でも、信じるしかないのか。日暮瑞希。彼女は凶悪過ぎる。異常を超越しそうでいる。僕が敵うような存在ではなかった。

僕は彼女の目玉を握りつぶした。これで何度も殺した事になるのだろうか？気付いたら彼女が目の前で散っている。そして瞬きをする間に彼女は笑っている。無駄だと解っているのに。それなのに。何故か彼女を壊そうとしてしまう。まるで、お気に入りのおもちゃを興味本位で壊してしまった子供のように。念入りに。執着深く。何度も何度も。

僕は微かに笑った。彼女も釣られるようにして笑った。僕はその笑顔を一瞬にして消した。綺麗な肌色の皮膚が爛れしていく。美しい造形が崩れていく。彼女のグニヤリと変形した骨格を僕は鑑賞した。気付けばそれは消えていた。そして、僕と同じ景色を見ようとしているかのように彼女が僕の横にいた。僕は彼女を赤い花にした。花は枯れる事無く人の形に戻った。

「ねえ、もう終わりにしない？私もしたいことがあるの。あなたを早く元通りにしたいの。だから、もう終わりにしよ」

彼女はどこからともなく、光を放つ謎の物体を取り出した。光は明るいのにもかかわらず、随分弱弱しいな。こんなもので何ができると言うのか？これで僕をどうするつもりなのか？

「これはね、願い星って言うの。あなたが使ったものよ。願い星は使い捨てじゃないの。願いを叶えればそれに応じて、光は弱くなる。それでも光があり続ける限り何度も願いを叶えられる。これをくれた人は言つてた。これだけ光つていればあなたを元に戻すには十分だ、って」

願い星？僕が使った？願いを叶える？それをくれた人？僕の知らないところで話は進んでいる。僕の知らない世界で、僕の知らない事が。僕の事なのに、僕だけが知らない。理不尽だ。僕は僕のものだ。僕が一番僕の事を知つていなければいけない。なのに
「それで僕をどうするつもりなの？」

「元に戻すの。狂ってしまったあなたの世界を綺麗サツパリ元通りにするの」

狂った？僕の世界が？そんなことはない。僕の世界はいたって正常。異常なんて見当たらない。瑞希さんの方が狂っている。自分のことを棚にあげて、僕の事を貶めるのは止めて欲しいな。僕はこの世界のように正常なんだ。狂ってなんかいない。時は、飽きもせず、延々と同じ音を繰り出している。空気は、尽きる事無く、果てる事無く、延々と僕を渦巻く。光は、枯れる事を知らず、輝きを与えている。花は枯れ、豚は肥え、空は流れ、日は暮れ、心は廃れ。どこにでもある日常の響き、変わることのない日常の趣き。この世界のどこに異常があるというのか？僕の世界は、僕の瞳には、あまりにも正常すぎる。そう映る。なら、彼女はどこに狂いを見出しているのか？わからない。どうでもいい。僕は破壊者。その思想さえ破壊する。

「まず、瑞希さんをわざわざさせてあげるよ。だから楽に苦しんで死ね」

僕は彼女の脳を抜き取った。脳漿は、僕の手に移るのを拒むように垂れていった。彼女の、脳のしわの一一つを念入りに刻んでいった。彼女の意識はどこにあるのだろうか？どこでもいい。全て壊せばいいんだから。僕はそれを右脳と左脳に引き裂いた。少しの間、断面を鑑賞して、中を抉った。

「そんなことしてあなたのが正常なの？狂ってるに決まってるでしょ？」

空っぽの頭で彼女は言った。空っぽの頭で彼女は動いた。空っぽの頭で彼女は 僕を抑え殺した。

「お願い、お願い。この星に願い。これで終わる。これに願えば全て終わる。願うよ・・・・・

壊れた世界を直して！

わ
た

勝ち前れる！足が前れる！頭が前れる！全て前れる！何もなし
．．．．．私の世界が．．．．．

「破壞破壞破壞破壞破壞破壞破壞破壞破壞破壞破壞破壞破壞破壞破壞破壞破壞破壞破壞」

わ、僕！僕は最後に全てを崩してやつた。破壊してやつた。壊した。壊れた。世界の塵が降つてくる。世界の埃に包まれた。世界の膾が沸いてきた。世界の叫び声が聞こえる。断末魔の叫び。僕の叫び声。千切れ行く四肢。

これで最期。全て終わつた。
私はゆつくりと目を瞑つた。

九章『終了』の合図

九章『終了』の合図

戻った。やつと、やつと瑞希の世界が戻った。瑞希の世界が戻つたってことは、俺は又死ぬことになるな。まあ、それでもいいか。瑞希が元に戻ったんだから思い残す事なんてないわけだし、実際は存在しない俺の命。瑞希のために使えるのらお得じゃねえか。

おつと、腕に重みが

俺も正常になつたわけだから感覚が戻ってきたんか。俺の命はもう長くないつてことだな。最期に俺の腕の中にいる、瑞希の顔を拝んでおこう。キスくらいしてもいいだろ。

視線を落とす

「み、ずき？」

おいおい、嘘だろ？ どうしてこいつたんだ？ 待てよ、おい！ ふざけんな！ は？ こんなのに聞いてないぞ。何でだよ！ なんで

瑞希、日暮瑞希が俺の腕に包まれて、血だらけになつていた。
しんである？

シンデル？ ミズキ？ エ？

「瑞希つ！ おい！ みずきい——！」

俺は瑞希を乱暴に揺さぶった。

「う」

「瑞希？ 瑞希？」

「なあに」

良かつた、意識はあるみたいだ。なら、今すぐ病院に連れて行けば助かる。はは、脅かしやがって。心臓に悪いよ。

「瑞希、待つてみよ。今すぐ救急車呼んでやるから」「えへ、そんなことよりさ、あなたの 名前。教えてよ

「ああ、あとでゆっくり教えてやるよ。漢字の書順まで丁寧に教え

てやる」「

俺はズボンのポケットからケータイを取り出そうとした。 . . .

・・え？

腕がねえ。

ちよ、なんでだよっ！さつきまであつたじゃなええか！まだ体はあるじやねえかよっ！何で腕だけなくなつてんだよっ！

「瑞希、腕動かせるか？俺のズボンのポケットからケータイ取ってくれ」

「 そんなことよ、なまえお しえて？」

やばい、瑞希の声が小さくなつてきてる。弱弱しくなつてゐる。早くしねえと。このままじゃ瑞希が

「名前なんてどうでもいいだろがっ！早くケータイ取れ！死ぬかも知れねえんだぞ！」

「 もう、もういこよ。私、もうこい。どうせ、あなたも消えるんでしょ？ならさ、一緒に逝こいつよ」

瑞希は血を吐いた。いや、吐き続ける。どうすればいいんだ？俺は、この状況で何をすればいいんだ？一緒に死ねばいいのか？じやあ、何のために俺は瑞希の世界直しに来たんだ？折角蘇つたんだぜ。無駄死になんていやだ。俺が初めて、初めて壊すんじゃなくて、直したんだぞ。なんで結局壊れるんだよ。ちくしょう

「ああ、わかつたよ。だからもう喋んな。その腕で、力尽きるまで抱きしめてくれよ」

「うん」

俺の体を瑞希の腕が包んでるんだろう。また感覚が消えちまつてる。折角抱きしめられてるつてのに。ムカムカするなあ。

「な

瑞希が俺の耳元で何かを呴いた。最初の「な」しか聞こえなかつた。

「ん？どうした？」

反応がない。

「おい？瑞希？瑞希つ！？」

「反応がない。」

「これが何を意味するのか

「わかってる！それぐらい。でも、否定してくれよ！」

「なあおい！否定しろよ！さつきまで見たいに世界を否定しろよ！なあ！クソッタレガツ・ふざけんなよつ！どうしてこいつどきは否定しないんだよお！何で肯定すんだよつ！なあー聞いてんのか！」この腐った結末を否定しろよ！」

叫んだ。声はでていない。もづ、俺は声を出す事すらできねえのかよ

！？

今まで俺を抱きしめていた瑞希が、動いた。もう動かない。

重力に従つただけ

俺は、俺の体の中で倒れてる瑞希を見た。もう動かない。「終わつたようですね。お疲れ様です、少年君」

薄気味悪い声が俺の頭に響いた。

「てめえ、じうじうことだよつ！何で瑞希が死んでるんだよ！」

俺は声が出ないのにもかかわらず、そいつに向かつて叫んだ。いや、吼えた。しかし、そいつは俺が何を言いたいかわかったみたいだ。

「言つてませんでしたか？願い星に願いをすれば、願い主の、少年君の世界が代償として変えられると」

そんな 結局俺が瑞希を殺したってのかよ

俺は破壊者でしかないのかよ。

「少年君、君も、もうじき消えるのですよ？何も案じる事などありません」

そいつは俺に近づいて、俺を蹴つた。しかし、蹴られたことにして、転がったのは瑞希。瑞希の屍だった。

「何してんだよつ！」

「何となく、邪魔であつたので蹴らさせて頂きました。憤慨なさるとは思いますが、その憤慨すら、間もなく、跡形もなく消えるでしょう」

そう言つてそいつは回れ左をしてどつかに消えていった。

俺は瑞希の下へ行こうと体を動かしたが、動かない。動けない。動く体がない。歩み寄るための足がない。音を聞くための耳がない。抱きしめるための腕がない。声届けるための口がない。香り愉しむための鼻がない。包み込むための懷がない。涙零すための目がない。瑞希想うための心がない。

全て消えた。

これが死。全ての終わり。何も残らない。消えて終わり。俺の、俺の物語の終わり。続編などない。ここで終了。

終章『主催者の眩』

実際に面白いものを見せてもらつ事ができた。満足だ。やはり、人間と言うものは面白い。実際に操りやすい。何故、疑わないのか？欲に目が眩んだ人間と言うものは、思考力が低下するのか？

あの少年君は自分の世界が変えられるということに対してもう思つたのか？どうせ、一度死んだ命、彼女のために使えればいい。どうせ、自分の世界は一度終わつたんだから構わない。そんな風に思つたのだろうか？愚かだ。愚かな少年君の中にはお嬢さんの存在しかいないと言うのに。

お嬢さんは最期に何を言つたのか？おそらく、少年君の名前を聞こうとしたのだろう。あの少年君も素直に最初から名乗つていれば良かつたものを。結局聞けずじまい、言えずじまい、知らずじまい。

何故隠し事などするのだろうか？そんなことしても無駄だというのに。隠し事をしても結局後悔するだけだというのに。あの少年君の名前は、隠すほどの名前なのか？そこまでして隠したいもののか？

まあいい。少しあの少年君の名前は気になるので、あの少年君が生きている世界を作ろう。あの少年君の死を悲しむ人間は何人かはいる。その人達に願い星をちらつかせれば、簡単に。

お嬢さんのことはどうしようか？いや、お嬢さんに關しては特に疑問などないな。お嬢さんの存在自体は大して価値がないというわけか。お嬢さんは、少年君がいたからこそ、価値があった。ならば、あのお嬢さんの物語はこれ以上必要ない。お嬢さんには世界から消えてもらおう。

こちらも自分の命を削つてているのだから、愉快な物語を見せてもらわないと困る。次の人間は誰にしようか？候補は一人。あの少年君に思いを寄せている少女さん。もう一人は、最後に取つておこう。

最後に取つておく一人。あれは貴重だ。きっと、何よりも面白い物語を、世界を見てくれるだろう。あの物語を見る日も、随分近くになつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2189ba/>

願いごと

2012年1月14日16時59分発行